



寄り道顛末記

武田 巧（たけだ たくみ）さん

1983年明治大学商学部卒（1年3か月海外留学）
明治大学英語部 ドラマセクション

現在、明治大学 政治経済学部 教授

1982年米国ニューヨーク州立大学バッファロー校、
1983年明治大学商学部卒業後、本学大学院を経て、和光大学専任講師、中華人民共和國北京外国語大学招聘講師。
2000年より本学政治経済学部助教授、2013年同教授。米国コロンビア大学客員研究員、タイ国シーナカリンウィロート大学客員教授等を歴任。現在、明治大学副教務部長を兼務。

写真を見て、「見覚えがある」と思う方がいるかも知れません。私の明治大学着任は2000年ですから、それ以降、政治経済学部の「マクロ経済学」「ミクロ経済学」を履修した方がいるかもしれません。もし単位認定していなければ、この場をお借りして謝っておきます。以下、私のこれまでの寄り道にお付き合い下さい。英語部の新たな可能性についても探ってみたいと思います。

明治大学在学時代

明治大学商学部に入学したのは1977年、英語部では70代です。真直ぐに道を進んでいれば、卒業は1981年3月のはずでしたが、2年間寄り道をしてしまいました。しかも寄り道はその後約10年続きました。英語部には自ら部室に押し掛けました。誰一人として声を掛けてくれなかったからです。以後、英語部の部室が大学での私の居場所となり、大学生活は英語部を中心に回り始めました。セクションはドラマ。4大学が競い合ったFUETでは、3年次にギリシャ悲劇「オイディプス王」の主演を務めました。3年次に掲げた目標は板橋杯スピーチ・コンテスト優勝、FUETでの総合優勝と主演男優賞です。板橋杯は優勝しましたが、FUETは残念な結果に終わりました。挫折感に苛まれました。

4年次になると、皆の関心が就職に向かいますが、私は独り蚊帳の外。留学するつもりでした。留学資金はアルバイトで捻出しました。同期が1981年に卒業したのを見届け、休学届を提出し、同年6月、米国ニューヨーク州立大学バッファロー校という未知の世界へと旅立ちました。当初は英語研修を1年間受講する予定でしたが、既に英語の入学基準を満たしていた所為もあり、こちらの大学に編入学し、卒業しようとの無謀な計画を立ててしまいました。上手く行けば、1年プラス3か月で卒業証書が手に入るとの計算でした。留学制度が整った今日であれば、二重学籍は問題ですが、当時は抜け道だらけ。婚姻関係に置き換えれば、正式な離婚前に新たな結婚生活に入るわけですから、重婚罪です。勿論、明治には内緒でした。

1年3か月に及んだ留学生活

秋学期が始まり、地獄の日々の幕開けです。履修を決めたのは4科目。各科目とも週2回ないし3回、毎回200頁を超えるReading Assignmentが課されました。4科目ですからその4倍です。生活の中心は図書館となり、朝まで図書館で過ごし、そのまま授業に出席することも頻繁でした。とにかく予習が肝心。英語が聞き取れても、専門の知識が無ければ、中身は珍紛漢紛だからです。最初の試験は中級マクロ経済学でしたが、答案が戻されると、目の前が真っ暗になりました。28点と書かれていたからです。ところが授業終了後、担当のドイツ人の教授が私の許に来て「おめでとう。君が最高得点だった」と握手を求めてくれました。何と30点満点の試験だったのです。

とにかく毎日がこうした連続でした。春学期も夏期セッションも同様の日々でした。学期が近づくと、胃の辺りがキリキリと痛み始めたのを覚えています。そして、1982年9月、同大を何とか卒業することが出来ました。卒業間近に例のドイツ人教授から告げられた言葉が、私の支えとなりました。「君は当然大学院に進むべきだ。君の成績であれば、奨学金が支給されるから、1ペニーさえ負担する必要ない」。米国でなぜペニーなのかは疑問でしたが、米国の大学教育に思わず涙しました。

1年3か月に及んだ留学生活は私を大きく変えました。まずは経済学に魅了されました。加えて、本来あるべき大学の姿に圧倒されました。各科目の初回授業で必ず配られたSyllabusなるものには、すべての授業日とその日に扱う内容が記載され、予めどの文献を何頁から何頁まで読んでおくよう求めていました。成績評価も明確。Midtermは全体評価の何%、Finalは何%、Essayは何本

で、それぞれ何%、授業への Involvement は何%といった具合でした。質問を受け付ける Office Hour も週 2 回程度用意されていました。学生による授業評価、24 時間開いている図書館、コメント付きで返却される Essay、点数付きで戻ってくる答案等々、当時の日本の大学との差を痛感しました。学生と教授陣の国籍も多様で、University はまさに Universe でした。日本の大学を変えてみたい、そんな不遜な考えが芽生えました。遅れているからこそ、自分にも活躍する機会があるはずとも言い聞かせました。そして、2 年遅れで明治大学商学部も卒業し、大学院に進学。とは言え、大学の専任教員に収まるまでは苦勞の連続です。

明治大学 教鞭の道へ

前任校の専任講師に着任したのは、1992 年、私が 33 歳の時ですから、皆さんとは約 10 年の差があります。29 歳で結婚。妻の両親には「3 年以内には大学の専任教員になる」と啖呵を切ったものの、専任職に就けたのは結婚 4 年後でした。妻には未だに頭が上がりません。そして 8 年後の 2000 年、明治に戻ってきました。今振り返れば、英語部には感謝の言葉しかありません。英語学習を続けてきたことが、留学、経済学、そして大学という世界に私を導いてくれたからです。

明治大学着任後も、英語部での経験は大いに役立っています。本学は現在、国際連携機構の下、年間 4000 人を海外の大学に派遣し、同じく 4000 人を海外から受け入れる目標を掲げています。既に年間 2000 人超の派遣と受入れを実現しています。その追い風となったのは、2008 年に本学が文科省により国際化の拠点大学 13 大学の 1 校に選ばれたことです。13 大学の内訳は、東大、京大、九大、東北大、名大、北大の国立 6 大学と、慶応、早稲田、上智、ICU、明治、立命館、同志社の私立 7 大学でした。その後、2014 年から始まる「スーパーグローバル大学創成支援」対象校にも選ばれました。

2021 年 1 月現在、本学の海外協定校は 57 カ国・地域の 361 大学、そのうち 45 カ国・地域の 266 大学と学生交流を実施しています。米国のスタンフォード、コロンビア、UC バークレー、英国のオックスフォード、ケンブリッジ等々、いずれも本学の協定校です。奨学金も潤沢です。上記トップスクールへの留学ならば、最高 300 万円まで助成されます。勿論、返済不要です。

各学部も独自の国際交流に注力しています。2012 年、私は政治経済学部の国際交流委員長に就任し、その後 7 年間、学部の国際化に尽力しました。その間、

学部国際交流プログラムは僅か2つから40超まで増えました。派遣人数も新型コロナウイルスが猛威を振るう前は、学部単体で年間300人超、受入れも200人まで増えています。また、計4から4年半で本学と海外の大学双方から学士号を取得するダブル・ディグリー・プログラム、計5年半で本学学士号と海外大学院の修士号を取得できるデュアル・ディグリー・プログラムも、米国、オーストラリア、タイの6大学と実施しています。勿論、重婚罪は不適用です。

明治大学英語部の皆さんへ

明治大学はここ10年で変貌を遂げました。英語部の皆さんには、もっと積極的に留学機会を利用して、本学のグローバル化を牽引して欲しいと願っています。英語部の活動こそ留学で生き、その後のキャリアに繋がるからです。ところが、就職活動の早期化に伴い学生の多くが3年次にインターンシップを始めようになると、日本を離れる学生数が伸びなくなりました。とりわけ英語力が備わり、専門知識も身に付く3年次こそ留学に最適と思うのですが、多くの学生が足止めされています。気持ちは理解しますが、実に勿体無い話です。なぜなら、長期留学を選択した学生の多くが、たとえ卒業が遅れても、結局は就職活動で成功を収めているからです。ダブル・ディグリーに挑戦した学生の殆どは名誉卒業生として表彰され、企業から引く手あまたです。留学先の代表に選ばれ国連に招待された学生もいれば、IMFの奨学金を手にして米国の大学院に進学した学生もいます。

「皆が留学したら、英語部が存続できない」等と先輩方からお叱りを受けるでしょうし、英語部との両立は大変でしょうが、留学先からでも、オンラインで英語部の活動に参加できる時代です。私は現在、大学全体の副教務部長職にあり、春先には6000超の講義のオンライン化に忙殺されました。今後は海外の大学とのオンライン講義の相互提供等が確実に増えるはずですし、私自身も米国協定校にオンデマンドの講義を提供しています。

オンラインの構築は新たな可能性を切り開き、本学の全教室が世界と繋がっています。英語部の活動も新たな可能性を探ってみてはどうでしょうか。そして、寄り道も楽しんでみませんか。周囲の景色も新鮮ですし、新たな出会いもあるでしょう。勿論、本学教員の一人としてお手伝いすることがあれば、声を掛けて下さい。以上、雑駁な文章になってしまいましたが、お許し下さい。